



生態系保全は“バランス”の保全

オオタカは増えている？減っている？

近年、里山保全が注目されています。中でもオオタカは、食物網の頂点に立つ猛禽類として、保全の象徴的存在になっています（図1）。個体数の推移を調べることは、保全上とても重要なことですが、この種の個体数の増減についてきちんと調べられたことはほとんどありません。とはいえ、過去の生息数を調べることは今となっては不可能です。そこで個体数の推移を動物園での過去の飼育個体数を使って推定する方法を試みました。



図1. オオタカ（撮影／藤原岳浩）

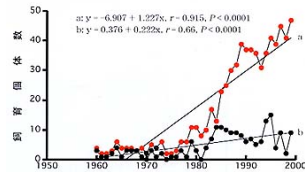


図2. 全国の動物園でのオオタカの飼育個体数の推移
 ●：単純合計個体数
 ●：各動物園の個体数増加分（前年比）の合計
 （Kawakami&Higuchi(2003)改変）

動物園で野生がわかる！

オオタカは、もともと動物園で展示用に収集飼育している種ではありませんから、飼育個体の多くは保護個体と考えられます。そこで、動物園の飼育個体数は傷病鳥として保護された個体数に比例し、それは野生個体数に比例すると仮定します。この前提で、全国の動物園でのオオタカ飼育個体数合計の推移を調べてみました（図2）。すると、オオタカは過去20年間に激増していることが読み取れます。ただし、環境意識の向上による保護数増加、飼育技術の向上による寿命長期化などのため、増加傾向が過大評価されている可能性もあります。

減っているのはサシバとミソゴイ

次に同様の方法で、同じく里山を生息地とする高次捕食者として、タカの一種であるサシバ（図3）と、サギの仲間ミソゴイ（図4）について調べてみました。すると、これらの個体数は激減していることがわかります（図5、図6）。オオタカとの違いは、一体何でしょうか。

両者の何が違うのか？

まず、サシバとミソゴイは渡り鳥です。彼らが越冬する東南アジアの森林は過去30年ほどの間に減少傾向にあり、越冬場所を奪われている可能性があります。次に、食物の違いがあげられます。サシバは両生爬虫類を、ミソゴイはミミズなどの土壌動物を好みますが、これらの食物は農業や環境悪化のため減っています。これに対しオオタカの食物は中型の鳥獣で、その中には都市近郊で増加しているドバトやムクドリなどが含まれています。

また、オオタカはヨーロッパから日本まで広く分布していますが、サシバは極東アジアのみ、ミソゴイは日本でのみ繁殖する分布域の狭い種ですので、我が国でのサシバとミソゴイの保全は非常に重要です。



図3. サシバ（撮影／藤原岳浩）



図4. ミソゴイ（撮影／藤原岳浩）

主役は誰だ？

このような現状にも関わらず、環境省レッドデータブックでのミソゴイの地位は準絶滅危惧種でしかなく、サシバは掲載さえされていません。そして実は、彼らより高い地位の「絶滅危惧Ⅱ類」であるオオタカは、ミソゴイの捕食者にもなっているのです。確かにオオタカも保全上重要な種ですが、増加傾向の種が減少傾向の種を捕食しているとしたら、減少に拍車がかかるのは目に見えています。

生物界は様々な種の相互作用により成り立っていますから、各々の種を別々に保全することはできません。今後必要なのは、種の保全ではなく、種間のバランスの保全なのです。増加中の捕食者が減少中の「希少種」を捕食していれば、生態系のバランスは崩れてしまいます。それがもしオオタカだとしても、その種の保全だけを考えると、生態系全体の保全にはなりません。

これからの生態系保全の主役は、種間を結ぶバランスなのです。

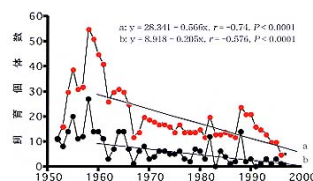


図5. 全国の動物園でのサシバの飼育個体数の推移。
 記号は図2と同様（Kawakami&Higuchi(2003)改変）

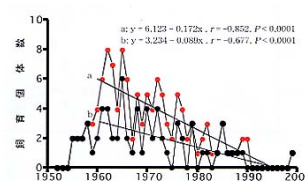


図6. 全国の動物園でのミソゴイの飼育個体数の推移。
 記号は図2と同様（Kawakami&Higuchi(2003)改変）

<実行課題>アウ2a

希少・固有動物の個体群に影響を与える要因の解明
 川上和人（多摩森林科学園）

研究の“森”から 第126号 平成16年7月30日発行

編集発行：森林総合研究所企画調整部研究情報科広報係

〒305-8687 茨城県つくば市松の里1番地

TEL：029-873-3211 FAX：029-873-0844

E-mail：kouho@ffpri.affrc.go.jp

URL：http://www.ffpri.affrc.go.jp/